



守り乃るに 後

6508  
^ 5







陽雲精養文庫

過中不捨毛虫より人たうり

蟻見

まゝのうかきく 齋のりう桶

雪丸

天祥のおよ一日 孫くみく

見

月よあるやそ 簾の音

丸

娘の故のけつ利口ふ 志如り

見

粟刈とんろ 廣き家尻

丸

下結もけし 時々は 提灯をて 舟

湯屋の庭うま いた 葉雲

見









二年と丁稚うらふきり

あゝは綾のけさひまれば

節志を海海程本の志赤

色と年ふと家家の松

小うけは釣り大根の

小鴨の履は物を

多る前さてもふね

京風ふくは男あけ

足

足

足

足

足

足

足

足

藤はかく茶茶碗の

えきまを惜る

咲くはまは十の

小花ちり志

志堂者気の舟

了場先の本権

曉やうらま

丸

丸

丸

丸

山

草

民



雪の積つきや井の清水

免谷

葉の本よ茂るやけり松山

林曹

海士の家の桐よあけり雪山

芦堂

苗代とせの松よ小風よ家

蘆白

昼も鳴蛙のあきさの溜り

宜雨

さういふとあけの雪よけり

月学

ふきくと武若小治の時よ山

芦滝

さよ本よと入地屋よあまり

一蓮

山吹のをつりて候ね雪の中

雪丸

日和よ霞る春のまき風

北三

平の葉よけき鉄を拵て陣

丸

立陣の戸よあつる雪きく

三

雪の月草籠の仕切交返り

丸

帷子よけり冷つて雪来海

三

枝むくはる雪のやううそ

丸

雪よいそめ回つみつ阿る

三



新水の湯を古き形に備へせ  
火急な用を志つて御を酒  
郎登く一弱い奴らに去て仕舞  
降るのよいとお折うらゑる  
口たぐ隣りの娘よくかめく  
結ぶくうらまは別々鳴たわ  
西陣くわされてあつる吾業  
心重家つと先もちははとて業  
之 九 之 九 之 九 之 九 之 九

月忠の教さく合を回る妻  
雛子の鳴もあのからはく  
けあろれををぬくうに出来ひ  
法美一巻の巻の首よよむ  
なは傘を括りけりあゆみ  
云々もあつた何家の様さく  
庚申の日うらね市のちゆつて  
ころれをうらねを尋ね  
之 九 之 九 之 九 之 九 之 九



志づくとぬきぬき 柳の葉の上  
 時代が古い ちんちん 画をえは  
 毛の黒い 嵐の録のなつとけ  
 夜更の神多 教かいて 暮る  
 摺小本のきによつて 文る月  
 たいやく 罨々 子ひの 漸き  
 ちんちんと 約々 暮る子の 文るき  
 志づよのせし 柳毛と小刀  
 丸 三 丸 三 丸 三 丸 三

志づくとぬきぬき 柳の葉の上  
 時代が古い ちんちん 画をえは  
 毛の黒い 嵐の録のなつとけ  
 夜更の神多 教かいて 暮る  
 摺小本のきによつて 文る月  
 たいやく 罨々 子ひの 漸き  
 ちんちんと 約々 暮る子の 文るき  
 志づよのせし 柳毛と小刀  
 丸 三 丸 三 丸 三 丸 三  
 阿丸  
 屋丸  
 風也



米あらしむる川端の月

河内

戸障子も世分の秋ハ明もほ

空丸

秋の悔めりちおりの秋

風也

るもちけは折る木槿と志くは

二齡

起あぐ耳かく猶と日の光

秋斜

船の帆もきうてたさぬ旅森は

山分

七子や魚よのせし。秋過し

亀青

まらつたれ合ねまらよ木のま

松を

田のこよ彼家様の茶々切

茶紫

又ちつゝと暮るはなるとの由

頑布

吹あらし風のうちし喜は秋

秋川

り杖や六秋さくやく松の下

路堂

ふよまの流るるまき牡丹は

呂文

ふふふれはくつら死の流くま

椋木

乞野の旅人ハ家浪戸の浦

西月



山中の如月満ちるや後の月  
 たるも君なくを後ふて巨連山  
 野の又下りておのひりまの原  
 としの暮る海に雪そとる斗  
 晴子ころちるをいころし梅の中  
 河豚の面新焼むけくゝ衣るら  
 山風の意うゝあつら梅もこき  
 夏に結ぶふちの雪の透りけり  
 聖揚  
 我竟  
 呂川  
 三岳  
 杜若  
 伯芝  
 似文  
 喜春

初雪れおる海とハ志し  
 夏草の朝咲しころニ交  
 筆に朝草をいり垣のうら  
 夏の子寺の控ハそれあつら  
 杉の枝や隣りの新草語  
 井の草芽して風の流るは  
 葉のふか咲き外て夏よけり  
 山と見らんの海や海かく  
 古苔  
 宗徳  
 桂存  
 城南  
 蓮中  
 卓比  
 泥中  
 一具



芥子掬て多舟の車よ退きを  
 繼とハ舟の森をうねり敷く  
 山影の相ハかどけく梅の果  
 和子や繼上かろけえせの先  
 いつとも等あつと清あつと  
 四五朝ハ終さ水汲や細の梅  
 雛子鳴や二つ並んく山の池  
 二階うづ指ひよおるる春風  
 標堂 燕く 雪鳩 露大 推己 草く 浮遊 用水

汲之の水よせし色芙蓉弘  
 松竹のおかしくを春の香  
 走り出く雛子の鏡中よ鳴よ  
 梅のふかあつと交へしう使く  
 立しはよ草々春風きくみよ  
 初秋の風扇うと出くうのう  
 簾もつと春風之る故きうか  
 菅神の灯けけけけけけ  
 葛尾 伏石 無涯 菊風 玉脂 風史 夏口 護物



森さゆ家や暮の八家まゝの林  
かさきくに陣も海もさきさきの重  
たかしくも物よ八交ら以都る  
たききりし家や和音は歌云  
以喜のるや合母の振るふ  
子よ持く牡丹よゆきるん  
摺火する猿よ友多し川板の跳  
わくき及暮の詠とく二階は

玄桂  
百麻  
完和  
二急  
採川  
路玉  
白石  
忠年

掃きてん老翁さくら  
骨とや雁鳴詠と海く  
赤粟も梅うらうらの山後山  
雪おろし風の巻は目よえゆ  
甲子ハ家うら斗のまき山  
名月や木隠きもせぬ田の祠  
春の夜や花よまあるぬの猫  
鏡つくし直よ是る家つし

ち三  
梅居  
霞  
茶瀬  
梅古  
梅紫  
古乙  
月登







うつくしき松のり影や尾長き鳥  
漱の音は遠くはさゆる涼き水  
晴於やとまらぬとく又とまらぬ  
きよく一社とつたまきあふ外  
見ふやあやや時々のふ破の算  
くふとまらぬけの葺きあふりく  
雛子あはれやそとまらぬ境ふ  
旅人はゆつとく退りあふりく

抱儀  
素明  
我竹  
よう  
井井  
古柳  
白棠  
苺石

一書よ起る流る小鴨々々  
淋れとまらふさの上れお撲取  
灯を消してまらぬあふさあふ  
日暮てもやれまらぬ赤さ榎ふ  
仏名のみもぬさぬ松りき  
丸くあふさあふさあふさあふ  
ふ人の望をいつまらぬあふ  
乃斗おひてまらぬ枯野々々

沙鷗  
梅意  
一書  
兆之  
管夢  
春峰  
自樂  
日人



人こころのあはれも急ぐに換ふに  
 人うまてはなきもまつ辰枝帳山  
 茶のふの吸て登るや山 畠  
 山けのふやしくきくや藤のふ  
 吹きてハ氣をりら辰や森のむ  
 飛龍のふハ時よくつうまけり  
 龍後とのまきさくや春の海  
 旅衣裳して子りきるみことふ  
 佛那  
 定頼  
 旭松  
 素峰  
 古夕  
 寸風  
 元朝  
 果那

抱てけふよ嘆ふりかき流るる  
 日の暮や春のきこられ白つー  
 初さく月のくらハ消ぬをく  
 春のりれむせも入るね海の果  
 松栢さよひの疲まや籠舟  
 小國の人よつらけくやの峯  
 石口まつく田ふくの常くは  
 出代て憂くきくあつまら  
 大基  
 まろ  
 宇橋  
 娘道  
 杖良  
 武陵  
 栢菴  
 卓池



松は楢新や一ふは愈よけり  
 春の月ふは煙さきかき山  
 朝くハ新は朝おく柳うか  
 るの夜ハとう然きよは蚊き学  
 くとくは隣も持くま門すこ  
 手やけの毎ハふおるすたれ  
 惟子の木古よえゆる二階は  
 左長長の徳は焼井のつふ

一路  
 宝山  
 乙種  
 栗三  
 五牙  
 茂推  
 榮舒  
 塙東

弥くは鶴入る日ちり初時ふ  
 一志く是晴してあさうは系鸕  
 山越く後りちうわきへの峰  
 きく是新く吹や名越の河系凡  
 ハ新や林の清徳よ出からし  
 夜のぬてさうとハ杖のせまふ  
 隣くはあき暮の咲りけり  
 只く園は日あはらけと春の山

鼎左  
 友彦  
 ひさこ  
 干唯  
 穀吹  
 崎芽  
 碧尾  
 碧山



夕立や好人の垣の低き所  
 海棠のるりよたる蒼山  
 路ハ滑く残る雪れ残る鳥  
 苔の田の久く出でて梅の香  
 故よまけく子起したる梅の香  
 雪の身と雪並に小枝の香  
 顔の先へとるや雪の香  
 人且よ居るくまらるるの香

十丈  
 玉光  
 而石  
 雪姑  
 一武  
 玉潤  
 韜光  
 霞涯

ねんのかげやこれよ自の秋  
 必本権柄を八折るよ忘れく  
 乃くくうまよ足盈はかしく  
 那中や梅をくけりやまきみ  
 にはかきや梅のくけりやまきみ  
 竹植くえの梅は眠るまき  
 戸よくけくまらるる梅の香  
 元日の清寺で梅の田舎の

蕙布  
 今立  
 儂学  
 魯人  
 了頼  
 泥人  
 志象  
 大梅

下五



一村は唯一本あり冬の梅  
花は入て一時降りぬ春の雨  
鶏の足耳立ち了る舞の菊  
むらさきよきふこといふも火山  
とくくと西のさきう鷗の後  
木兔はさくられさうと成るる  
花はくまけいふつるさうの懈憐  
籠ねの集うと降るさうのる

一蕙  
雄嶺  
眞産  
飯盛  
其岳  
朱芽  
寒了  
素白

杜宇河邊やう人の声ききけり  
河津やさくもえはふのちる  
大道一りさうとわさう猫のふ  
朝下や枯らうとけり絆の棠  
立待やふるとけりねの露  
酒とのむきよとあさう果の香  
浅茅生の煙のうへ春は月  
雪やさう灯の消ね棹木町

雲窓  
猿松  
古令  
機鷓  
庭程  
凡鳥  
今是  
護物



けをねい小松安と回をさう  
森時分の回をねや川らう  
葉のふやつ然てきる雪う舟  
年内よ一うち雪家柳う船  
雪よ森一柱古ハ色一竹ぬ人  
焚火しく雪とる木の葉波は  
霞奥や芒の穂うも相うう梨

菅笠  
波石  
葉積  
有雨  
上氷  
雪雄  
布尺  
麦村

朝のゆや松のふちハ耐と吃  
むく起の傾吹う柳う舟  
幾月秋ちうく人の恨一  
二之まん咲ゆく梅の葉う舟  
ふを好くものよすたは雪のふ  
東風吹やうううかう小石舟  
すいくと枯風ふくや二階口  
去柳の中うけはる果来白

米海  
桃斗  
石山  
伯夫  
荷乙  
易安  
菊菱  
省吾



了松の穂の天とつてんる露  
明時の霞あさるる松泉松  
昇言や柳のおくの雲の峰  
を江流や雲のそとれをの月  
あきふかきやも望田と七つ時  
わづらふるのおとけりまのま  
つさへてあき海あきひけり  
松屋ふたんの星りそはる三上

五丈  
羅扇  
李人  
三枝  
服靴  
番民  
素山  
る木

雪まからの露とらるるあはれ  
るりさるわわ世の梅は咲よるり  
朝風のまらけく咲ぬ露の上  
清くくろきのもくくやまのま  
霞とひくく人ともるけくく  
森くまけいあきまきく林の末  
松風のまきよたやなやまの水  
曇るも半日わらやう免のふ

楳老  
秋兔  
守鶴  
寸樂  
鹿丈  
松人  
素英  
出雲



旅人と又ゆきを花よ尾かけ  
 雛歌  
 短衣の裏山のふり新ひき  
 言つ性  
 初まや盆よのきる家殺棋子  
 欽節  
 らく書と又ても日永く文珠堂  
 蓬中  
 山里やあまようくし梅の節  
 嗽石  
 夕暮るくいさよひのくく梅の  
 田実  
 緒と八月の森くね古歌山  
 應く  
 初杖やけさいさく人の後く  
 龜道

梅素や侍子ゆきは只の園  
 茅東  
 以杖や葉かき山の旅はくた  
 全柳  
 るの梅きい中より白ひき  
 甲路  
 十六夜の名ハ青くく雨の月  
 藻雨  
 垣こしよくの峰あり梅月  
 湖組  
 心ねもげはたさくを小き浮  
 まよ  
 雛子あくや一の舞表ハ畠中  
 梨足  
 春咲くわらわむも葉も梅味  
 柳処

梅  
 丸



葉の光もみず研よちる垣根は  
 葉の香松いかく多る勢へ  
 春の風を死ねぬ鳥やけし月の  
 雛子鳴やむつとらとする藪の鳥  
 赤い鳥の木の葉やあまると  
 うらうらと鶯の森よあはれぬ松  
 泣きうらと種よむねのまるとは  
 けしれぬいさかきの葉の末うら

免年  
 梅菴  
 井二  
 几乙  
 省主  
 鳥嶽  
 言来  
 笛三

蝶くやうくく女の酒くはら  
 後世もきこく長果なほやわ  
 月よ厚鳴けはくしもら泣きも  
 さき切く水のそおつ山田は  
 湯よ熱く喜ぶふむりや華のむ  
 されいさそ子ねふもさき井は  
 子あふよ雷のよけり川まはは  
 その糸の伏をの煙霧軒はらり

芭竹  
 梧亭  
 素菴  
 文琴  
 思道  
 玉泉  
 土倉  
 赤弓

下江







五入る烟のかきこや鶴の音  
 籠ねや冥よ森芝の名いわけと  
 夫婦しつ子に是こふは踊ふ  
 き山の白く志けけく落の臺  
 多仙や星よ初めく思のいろ  
 梅咲や子あうききく世路の家  
 一粒の米にほりつは法佛名  
 山の月をきてまきくし唐の月  
 六石  
 仙腸  
 梅鉢  
 善雅  
 楚江  
 慶五  
 斗山  
 申高

梅こえてついでく海の本僅山  
 山るや石やうきく星月夜  
 名月の雲を風にあふち初  
 物と木のるふ持くくえんのも  
 夕立よいくつ嵐はく蟹の尻  
 多峰しから松好くけしめ月  
 梅枝よ夕月う家初くうに  
 むしるるき道ふんく梅の家



夕風や鴨と木の葉も 船の縁  
行くせの草にも 舟や船ふく  
又知つくる 海草も 雲の入  
を色板に 帯火のゆかり 此書  
しるしや 燈の一連 ありて 烟  
負しは 見えさし 君よ 黄葉も 咲  
梨子 柳や 大木 水の 流の 勢  
あう けいこ おも けいこ や 相一 葉

金葉  
荏叟  
六車  
画籠  
去芳  
雀煙  
雪々  
獨歩

春の香 花の形 けいこ  
舟の果 窮の 減りて たる 落の 系  
火灯 せいの 大さく ありて 籠の 表  
舟仙 や 舟の 又あを 風山  
雪掃 けいこ 舟の 舟の 舟の  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の  
舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

宇弘  
杉亭  
陰々  
藤中  
芥杖  
一壺  
嘯二  
何丸



松の中上枝後のもつのかを  
ふもふも揚えてお柳の

丹波園

高の山巴麻は方に家は人  
杖凡やうとてははく  
り野ともやや推のこりをも  
むれ地鳴さやけけの月  
まぬえ又是ははいさ

裏丁

一峰

月敏

菱梅

鬼丸

恬高

露梅

蝶のあゝりまやあゝぬる金

絲之

つ口てはさまたたつ牡丹山

飲雅

五六丁六の川上の流後山

白試

木は約つて人尋うはあゝを

後駕

四月やまやまの名め是はよき

辰角

春のねやまのくの木の山は

里童

娘凡の中ふもえそあゝ山

香頂

通系の新は強くまゝのほ

五芳



書生めいしつゝえさる浮葉山  
 雲の本とあつね梅も梅の本も  
 大空へあつてく時際の小川  
 あらよよ又人返りひたり猿取城  
 塔裏にあつねあつて短くそとり  
 初月やそのとあつねあつね好  
 年内の春や禁火よあつね  
 女房は吃らねくちあつね

屋島 世梁 子草 有管 遊鳧 呂調 北洋 菊池

晴さつておとせはつて以後の月  
 あつねにえさるあつねあつね杖  
 梅垣はあつねあつねあつね梅垣  
 たりあつね梅の小枝やあつね  
 川出とあつねあつねあつねあつね  
 糸風の回もあつねあつねあつね  
 あつねあつねあつねあつねあつね  
 水辺やあつねあつねあつねあつね

志宇女 橙井 梅壽 子鶴 是隆 古谷 俵丸 葵圮

一 井 陸



味噌汁はくはまらけう梅の花  
 遠史  
 りきの小長うするやけしの月  
 案松  
 飛地るるや陣のうえのふ  
 以都美  
 押へた子の力家一飯のう  
 大鏡  
 ひと目も光もれらう林日和  
 麦洲  
 家根勢くくらくくはる柳山  
 卓郎  
 津うらねねや作は流しきのみ  
 梅間  
 空は眼の若くあふけさ小橋山  
 梅室

一連は松山こぼる月お山  
 一費  
 小羽くさの時のあこ、園の家  
 奉泉  
 家神よ、露と後す、世を  
 信竹  
 雪の融つきや世の清水  
 免器  
 山吹の夜まきさか茂のあ  
 季上  
 森てくも燈子のむく萩のあ  
 木雄  
 後もくあさきの月お山  
 岐方  
 浮島のまきさか山と二月山  
 咏月



是所なく 松歩ふえぬ  
 老の月かきうれ家のこころい  
 魚をわたり浪のあつたり  
 起くやうなるふかきつも  
 ちれやまゆや 牡丹の風は  
 山にや暮りけりまのあ  
 名川のきもまて居る様にお  
 遠くゆく居るまの鳴る

安房  
 嵐古  
 龍龍  
 不明女  
 三保女  
 少せ女  
 丹嶽  
 明良

古きや遠く海へは 柴人の  
 いよの住居うらやうなるをち  
 をり孤燈のかりあきもやまの  
 松のこころもまきつめれ涼さ  
 柳もあえはけり露垂れ  
 むらやう松とのま枝におちく  
 坊主海つき終るあるハ食中  
 の厨まひりけりまの空まひり



志ろふり一昔の雨まゝく夏十條  
る一のあひのあしとあ余の破意  
あうちい様うしこむの座くら  
は押あうられつ懐然とを  
譲の一端よに笑しくやうく  
屋をよめつし短くあまの勢  
の無えをまへまの

ち山の丁場をけしうきふの年 楓下

あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに  
あまのついでに









三好  
子  
長